総括

ロバート・キャンベル

お疲れ様でございました。２日間にわたり、大変盛り沢山な内容で、本当に充実した時間を過ごすことができたと思います。発表や講演をされた方々はもちろん、会場運営をされた国文学研究資料館の方々にも感謝を申し上げたいとともに、私自身、ふつう学会に行って２日間発表を聞かされていると本当に疲れてぐったりして帰ってきますけれども、今回はむしろ元気をいただいて活性化したような気がします。

去年の８月にこの少し耳慣れない日本語のテーマ「語られる人称・なぞらえる視点」を決めました時に、これはちょっと難しいのではないか、特に留学生の大学院生たちがこれをどのように捉えるかということを懸念する向きもありました。ですが、この研究集会での数年の傾向でありますけれども、少しずつ絞り込んで具体的なテーマを決めて出していきますと、かなり直球型でそのまま応えてくる応募者たちが多いということがあります。今年も大勢の方々に応募していただき、その中から今日発表してもらう方々を選ぶ審査というのはかなり大変なことだったというのを覚えています。

そして、今回テーマに即して発表してくださった方も、そうではない方も、本当に充実したそれぞれの視点というものとそれぞれの手法というものがあって、それを共有することが出来ただけでも有益な会だったと思います。視点あるいは人称ということに関しては、人称の具体的なテクニカルな問題として、どういうふうに日本語の叙述のなかで人称というものを認定し、文学作品のなかで捉えるかということを具体的に論じる発表が、たとえば漱石の『草枕』でありますとか、あるいはポスターセッションですが村上春樹の発表も、具体的にどのように人称を捉えるかということから、人称そのものが特に近代におい

て変化するもの、ひとつの作品のなかで変化を半ば戦略的に捉えて仕組んでゆくことによって作品の世界を作り上げてゆくという、そういった視点の変化であり「ゆれ」であるということは、同じように『草枕』や村上春樹あるいは今日発表していただいた高橋新吉の作品について、共通するスタンスを感じることが出来ました。特に高橋新吉をめぐる発表のなかでは分裂する自我が一人称を使い、四人称というものを使い、そのスイッチバックを上手に交替させることによって狂気の予兆あるいはその主体そのもの、記述する主体が激しくゆれていくということが作品の中身と有機的につながって、つまり自称史の変化そのものが日本語で書かれた近代の小説のなかで重要な観点であって、観点というとまたこれは視点とか比喩的な使い方になりますが、そういったところとして定位されたように思いました。視覚資料として、期せずして今日最後にゴーリさんの発表とスミッツ先生のご講演のなかで図を見せていただきましたけれども、まさしく前者の方では「指差すこと」あるいは「指すこと」が名所図会のなかで視点を集中させない、その代わりに流れる視点、見るものが一箇所ではなくて様々な方向に眼差していくというような事態を画に即して見ることができました。そういった視覚資料あるいは視覚文化のなかの視点という問題と人称という問題をどういうように総合的にあるいは体系的に捉えるのか、あるいはそれを分けて考えるべきなのかということについてはもう少し深化させる必要があると思いますが、問題提起としては今回本当に有益なヒントをいただいたような気がいたします。本当にありがとうございました。

さて、来年のことですけれども、来年が34回になりますが、日程それからテーマを昨日先生方に集まっていただいて話し合って決めることが出来ましたので、少しお知らせしたいと思います。来年11月の27日28日、同じく週末ですが、11月の下旬にまた集まって賑々しく研究集会を開きたいと思います。テーマは「書物としての可能性」、副題が「日本文学がカタチになるまで」というものです。「形」をカタカナで書こうということですけれども、つまり書物というものを、まさしくこの国文学研究資料館の集会にふさわしい形態あるものとし

て、その視点から日本文学を見直し、書誌学的あるいは作品の成立論的に扱うようなことも含みます。しかし、そこからより広く典拠・影響あるいは執筆・編纂そういった成立論的な部分から、たとえば出版・流通あるいは注釈・再利用・インターテクスチュアリティーといったような問題を含めて、あるいはその先にキャノンということを含めることが出来ると思いますが、書物といったものを形あるいは過程として捉えて、作品や日本文学史そのものを捉えなおすきっかけとして考えていただければと思っております。カタチはふた通り書けると思いますが、カタチになったものを取り上げ考える、つまり形態学・書誌学的にものを考えるというのみならず、カタチになるまでのさまざまな過程というものを考えて作家・作品あるいはジャンル、さらにより広い社会の問題としての文学というものを捉えるひとつのきっかけになればというように思っています。ぜひ来年、今年発表しなかった、できなかった方々に応募してもらい、ここで発表者として再会したいと思います。

それから集会そのもののカタチも、それこそもう少し工夫をしたいと思います。数年前からポスターセッションというものを試みておりまして、かなり定着しているような気がしますが、ポスターセッションは本来もう少し短いもので、そもそもポスターがないポスターセッションとはなにかということを問う委員もおられます。そこで、ポスターセッションをまた別に5分くらいで、もう少し人数を増やして、図を使ったり、プレゼンテーションを工夫していただいたりして、どこかこの建物の違うところで同時にあるいは一日のなかで何回かやっていただくというようにします。そして今ポスターセッションと呼んでいる15分の発表をショートセッションと言い換えまして、それはそれとしてまた継続させていこうということを考えております。つまり、発表とショートセッション、そしてまた別の違うカタチでポスターセッションということを試みてみようと思います。その具体的な方法などについては、募集要項に少し詳しく記して、皆さんの手元にあるいはホームページからお伝えしたいと思いますので、ぜひそういった新しいカタチにも注目をしていただきたいと思います。

それでは、本当にお疲れ様でした。気をつけてお帰りください。また来年、お待ちしています。